

書評

〔評者〕
坂本長逸

日本医科大学教授・消化器
内科



小腸内視鏡所見から 診断へのアプローチ

松井敏幸・松本主之・青柳邦彦 編

B5判 頁192 2011年
定価 12,600円(本体 12,000円+税 5%)
[ISBN978-4-260-01446-5]医学書院刊

福岡大学の松井敏幸先生、青柳邦彦先生、九州大学の松本主之先生が『小腸内視鏡所見から診断へのアプローチ』と題した小腸疾患診断学の教科書を医学書院から出版した。ご存じの方が多いと思うが、福岡大学、九州大学は小腸疾患の診療ではわが国をリードする大学であり、消化器疾患症例を1例1例大事に解析する手法はいまや両大学の伝統と言ってもいいであろう。同じく福岡大学の八尾恒良先生、九州大学の飯田三雄先生は2004年度に両大学の膨大なデータを集約し、これまでとは比較にならないぐらい広範な小腸臨床に関する学術書『小腸疾患の臨床』を出版したが、今回の『小腸内視鏡所見から診断へのアプローチ』はそれに続く両大学の小腸疾患診療に関する学術書第2編と言える。

この2つの学術書の明確な違いは、2004年から7年を経て出版された『小腸内視鏡所見から診断へのアプローチ』では、小腸疾患画像診断学がこの間にいかに進歩したかを見てとれることであろう。さらに付け加えるなら、私はこの学術書ほど小腸疾患に関する画像を豊富に掲載している書物を知らない。豊富な症例と画像が本書の特徴であり、特筆すべきことと言える。つまり、疾患単位で記述された最初の小腸疾患学術書『小腸疾患の臨床』を、より実臨床に即して、今日のダブルバルーン小腸内視鏡、カプセル内視鏡画像とともに記述したのが本書と言える。

もう少し本書の内容を紹介すると、本書は診断の進め方、小腸X線検査、カプセル内視鏡検査やダブル

バルーン内視鏡検査の実際を総論でかなり詳細に紹介し、次いで内視鏡所見ごとに、所見から見た診断へのアプローチ、その所見を呈する小腸疾患、および鑑別診断と鑑別診断のポイントが記載されている。X線や内視鏡所見から診断にアプローチしようとする試みであり、極めて実臨床に即して書かれている。所見は、例えば粘膜下腫瘍をきたす疾患、アフタを来す疾患、浮腫をきたす疾患など、小腸の画像診断に実際にかかわっている先生にしか記述できないであろうと思われる内容となっている。したがってこのような所見にしばしば遭遇する小腸を専門とする先生には、なるほどとうなずける内容であり、これから小腸疾患診断学を学ぼうとする先生には必須の学術専門書と言えるだろう。この点も本書の特徴であるが、さらに特筆すべきは、所見から見た診断へのアプローチに続いてそれぞれの所見を呈する症例の内視鏡画像が100ページ以上にわたって掲載されていることである。しかも、写真が実に美しく、症例が豊富で、おそらくこれ以上に多くの小腸疾患症例の内視鏡画像やX線画像を示した教科書は他にはないであろう。つまり、症例の内視鏡画像のページを見るだけで、疾患の特徴が理解できる優れた小腸疾患内視鏡診断学教科書と言える。

このように本書は専門家、これから小腸疾患診断学を学ぼうとする先生、あるいは日常臨床で消化管内視鏡検査に携わる先生方には、ぜひ一読していただきたい専門教科書となっている。